

新潟産業大学報

青海波



第9号

発行日 平成9年4月5日
 発行集 新潟産業大学
 編集 新潟産業大学
 新潟県柏崎市軽井川4730番地
 TEL 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

大学が関わる生涯学習

学長 荊木久彌



「本学の将来展望」というテーマを与

えられたが、目下、教育活動を中心に、全学的な取組みをお願いして、自己点検を進めているさなかにあるので（2月末現在）、この作業に一区切りがついた後で、また機会を窺うこととして、今回は、指定のテーマに代え、標記の問題につき述べてみたいと思う。

大学関係者や来訪者から屢々、「大学開放として、どんなことを？」という質問を受けることがある。これまで、単に学校開放というと、小・中学校などが、市民に体育館やグラウンドを使わせることのように思われがちであったが、大学開放となると、その意味合いも急に複雑なものとなる。施設・設備の開放に止まらず、公開講座の実施、正規学生としての社会人の受入れ、教育・研究内容の社会的接近をはじめ、学生の就職斡旋や大学情報の公開などを含めていわれることがあるので、どこまで答えたらいいのか、返答に困ることもないではない。ここで

は、公開講座に焦点をしばって、生涯学習と大学との関わりの問題を考えてみたいと思う。

今日では、ほとんど生涯学習という言葉に変わってしまったが、以前は、生涯教育の呼称が一般的であった。多分、上から教え込むことをもって教育と思われがちであったことに対する、反発によるものであろう。最近では、より具体的、制限的にその内容を規定して、「リカレント教育」という言葉も盛んに使われているが、これも、生涯学習の中に入れて考えてよいのではなからうか。

最近における生涯学習ニーズの高まりを見ていると、その理由とも背景とも思われるものが幾つも数え挙げられてくるが、その主たるものは、言うまでもなく、労働時間の短縮に伴う余暇時間の拡大や職業上の知識・技術の継続的な学習の必要性、さらには、現代的課題に対する関心の高まりや国民の意識の変化であろう。

大学は社会に開かれた施設として、また、地域の文化的な中心たる役割りからして、生涯学習の拠

点となるべき使命を負っているものと考える。本学が昨年一年を通して関わった生涯学習講座だけを見ても、初めてスタートした第一回公開講座の経営講座・国際交流講座、公開講演会、ウーマンカレッジ、大学等提携講座その他どれも、多数参加者の期待に応えることができたと思っ

ている。もちろん、所管部署の教職員各位による意欲的な取組みと、講座等担当教員の理解と熱意があつてこそ成しえたものであり、感謝の気持ちには喩えようもなく大きい。

いが、本学にとって、当座、ここに重点をと考えているのが生涯学習への対応である。生涯学習に関する情報の収集、蓄積、伝達の整備を含め、大学が関与する生涯学習の充実に向けて、是非とも前進を図ってみたいものである。

大学が、地域コミュニティの一員である限り、自らの力量の範囲で、積極的に、地域に対し協力・貢献を考



新潟に魅せられたひと

経済学部長 鍋田英彦

東京の大学
でマスコミ
ニケーション

論を専攻されていたK先生が、あの時、こんなことを呟かれた。「新潟が何となく気に入ってしまったね……」。大学を定年前にやめて女房と新潟に住もうと思ってるんだ。二人の子供も結婚したこ

とだし……」。なぜ新潟なのか、その理由を尋ねてみると、「新潟の酒と魚、それと花火かな」という。それだつたら、東京にだって、それぐらゐは揃っているし、隅田川の花火だってあるでしょうとたみかけると、「それから……兄弟のようにしている大学時代の親友がいるんだ」という。

その真意がつかみきれないまま、その後しばらくして東京育ちのK先生が新潟市にマンションを購入されたと聞いた。

K先生は苦労して大学を卒業してから新聞社に入り、アメリカの大学院で学んだ後、大学の教員となった方である。初めてお会いしたのは今から十数年も前のことで、ある委員会で隣り同士になったのがご縁となった。大変なヘビースモーカーで両切りのピースを愛用されていた。人見知りをすると言っておられたが、人間味のあつなかなかゲンダイな方であつ

た。二つ折りにした英文の雑誌をさり気なく小脇にかかえたスタイルで、よく委員会にやって来られた。

酒が好きな先生が飲むところは、静かな感じの小料理屋か、落ち着いたバーで、騒々しいところは好まなかった。三年ほど前だったか、先生と都内のパーティ会場でバッタリお会いしたことがある。立食パーティであったにもかかわらず、どういう訳か二人とも定位置のまま動かさず、グラスを傾けて話し込んでしまった。それが先生とお会いした

最後となった。それから一年も経たないうちに、先生は不治の病で他界された。葬儀に新潟から駆け付けた親友の涙を誘う弔辞を聞きながら、先生はこの友のいる新潟でどのような晩年を過ごすつもりだったのだろうと考えてしまった。暑い暑い夏のことであった。

K先生は息を引き取られる前に「人生、概ね満足」という一言を家族にもらされたという。享年六〇才であった。

されどわれらが完成年次

人文学部長 加藤 榮一

わが人文学
部も、この四
月に新入学生

を迎えて、「ようやく」といふか、あるいは「とうとう」といふべきか、完成年度を迎える。人文学部は、いまから三年前、「環日本海文化学科」というユニークで前代未聞の学科を開設し雄躍スタートした。一学年の定員の約四分の一が韓国・中国・台湾・ロシアなどの諸国からの留学生で、教授陣も

日本人のほか右の諸国出身の専任教員を配して、キャンパスには四ヶ国語がとびかう「ノアの方舟」のような状況であった。この「方舟状況」のなかで、おしえる方もおそわる方も、当初はたがいに戸惑ったり面喰らったりもしたが、みな一所懸命に自己を適応させていったように思う。先生がたも、経験ゆたかな老練・新進気鋭の若手を含め、個性ゆたかな多彩の顔ぶれで、それぞれのベストを尽く

してこの多国籍の学生諸君の指導に当たった。そして、学生諸君も、あまり生活の利便に恵まれているとはいえないが、この軽井川キャンパスの静かな自然環境のなかで、学生生活に馴染んでいったようであった。その間に、教師の側にも、学生の側にも色いろな出来事もあり、なかには、かなり深刻なトラブルともいふべきこともあった。担当の先生がたはその都度、解決に奔走され、結果のいかんによつては心を悩まされることも稀ではない。国際交流は、いつも楽しいことや綺麗ごとばかりとは限らない。誤解や偏見やさまざまなトラブルを克服したうえで達成されるものである。しかしともかく、

この四月から完成年度を迎える。「ようやく」といふのは、そのような学部発足以来、学生諸君と共にした苦楽のあとを振り返つての実感である。一方に「とうとう完成年度」という想いもある。それは、卒業論文の指導に代表される専門科目の履修を有効にバックアップさせる体制をどのように構築し運用していくか、とか、就職戦線をいかに突き進んでいくか、という、完成年度以降に固な課題が眼前にひしめいていることであるが、そのほかにも、これまで三年間、一所懸命にやってきたものの、カリキュラムの内容や編成ははたしてこれで充分であったか、学生の教育

上のニーズに対して教員の数や配置が適切であったか、個々の講義や授業の内容が教師として満足がいき、学生に理解しうるものであったか、といった反省を踏まえて、環日本海文化学科をどのような学科として捉え、どのような特色を持った学科に育てあげるか、という将来に向けての大きな課題に挑んでゆかねばならないからである。学部長をはじめ、教員スタッフ一同は、人文学部をさらに魅力のある学部にするため鋭意努力したいと思つている。

授業暦の始まりにあたって

君は輝きたくないか？

教務部長 樋口正昭

降雪に傷ついた木の枝先と、道路や駐車場の脇に堆積した土埃が、人のまばらな校舎にもの寂しさを加えていたのは、つい此の間までのことだった。

その同じ場所に今は新芽が萌え、地面の緑が広がって自然の甦りを実感させてくれる。そして何よりも、キャンパスには久しぶりに学生の姿が溢れている。

澆刺とした彼らの行動とははずむ話し声は校舎に実によく似合う。四月は、大学においては特に「事を始める月」である。ただ、目的や反省なしに開始すれば、時の流れとともに初心を忘れ去ることが多い。そうならないために、平成八年度を通じて教務の立場で感じたことを述べてみたい。

卒業年度学生の履修状況を見ると、四年間で主にどういふ領域の学問に専念しようとしたか、本人の構想が見えて来ないことがある。ゼミや卒論に関連する科目の履修があまりにも少ないからだ。また、単位不足で三年次にゼミ履修ができなかったり、挫折して退

学する者も少なくなかった。

いずれも、バイトや単位の取り易さを優先したり、一、二年次に怠けたりした結果らしい。

対照的に、最初は目立たなかったのに、地味な努力を習慣づけ、いつの間にか澄んだ瞳と自信に溢れた風格を身につけた学生もいた。

そうした姿がいかに教える私達に大きな喜びを与え、励みになることか。教員は学生を教える。しかし、こうした学生達によって教員の誇りも育てられるのだ、と私は思う。

学生の本分は学問である。無為と安易を積み重ねていては、卒業後に「大学時代の輝き」を懐かしむことができなくなることを、年度始めに覚えておいてほしい。

昨年度は学生による授業アンケートを実施した。授業改善に向けては、提案や質問を行うなど、学生諸君にも協力してもらいたい。

また、今年度から履修登録と成績の電算処理を開始する。

学生のプロに！

学生部長 村山 実

「マックスウエーバは、プロフエッショナルの倫理感を資本主義発展の重要な条件としている。金まみれの政治、私欲に走る官僚、公正を守らない報道機関、投機に走る銀行、犯罪を犯す警官、子供

のしつけを放棄する親……。これらは、いずれもプロフエッショナルが倫理感を失った証拠以外の何物でもない。目先の金と権力のために、プロフエッショナルが本来の任務を忘れた結果である。」ある雑誌のコラムに、岡村迪夫氏の

このような意味の文章がありました。これは学生諸君にも考えて欲しい問題です。

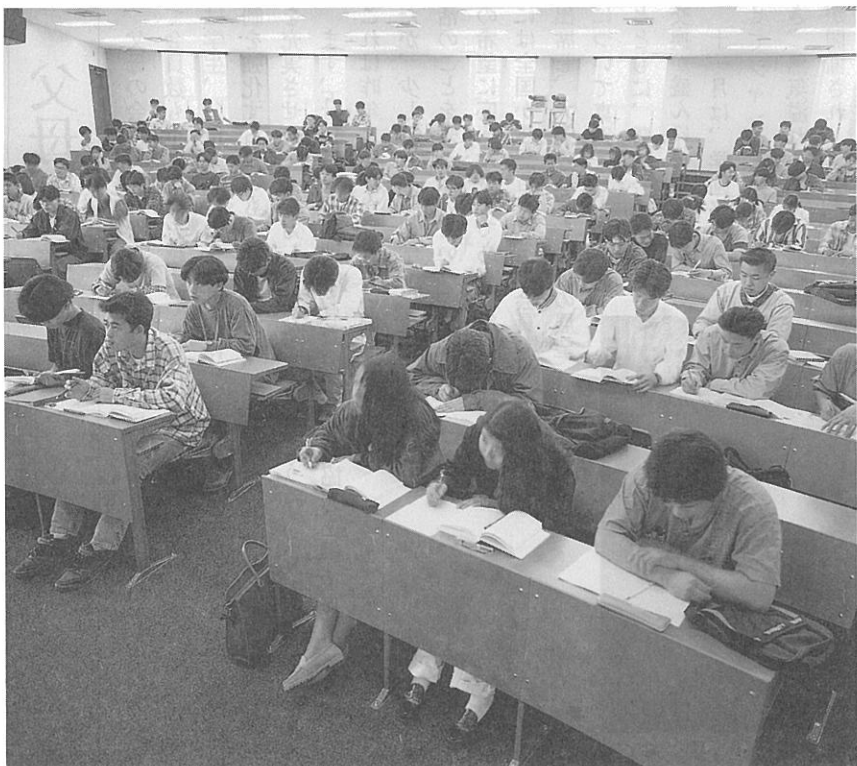
学生であつても、バブル崩壊や空洞化などの社会現象は他人ごとではなく、大きな影響を受けるところですが、現代のように、あらゆるものの変革が地球規模で求められる時代は、若者にとつてチャンスでもあります。このチャンスをもにするために、諸君には「学生のプロフエッショナル」になつて欲しいのです。

学生時代の数年は、人生のなかの一瞬ですがありませんが、それ

は自分自身に時間と金を投資して、人間として充電すべき貴重な一瞬なのであります。投資が大きければ、卒業後の実社会での配当も大きくなって当然です。アルバイト

のプロとなつて卒業後の練習に精を出すなど、大切な充電期に放電していたのでは、人生の本番で使うべきエネルギーは蓄えられないべくもありません。

何を指して大学に入ったのか、貴重な四年間をどう使うか、しっかりと自分に確かめて、一人ひとりが「学生のプロ」になることを切望します。



イギリス留学記

経済学部 助教授 四月朔日 良秀 わたぬぎ

私は一九九五年八月末から一年間イギリスのワイ・カレッジ(ロンドン大学)に客員研究員として留学しました。ワイ・カレッジは農学部でケント州のカンタベリー近くの田舎町ワイにあり、学生院生約一二〇〇名、教研究員一〇〇名のカレッジであった。学生院生は世界約六〇ヶ国から集まり国際色豊かであり、年齢層もかなり広がった。私は外国人院生寮に住み、スリランカの院生との共同研究室を与えられ、農業開発を中心に研究生活を送りました。

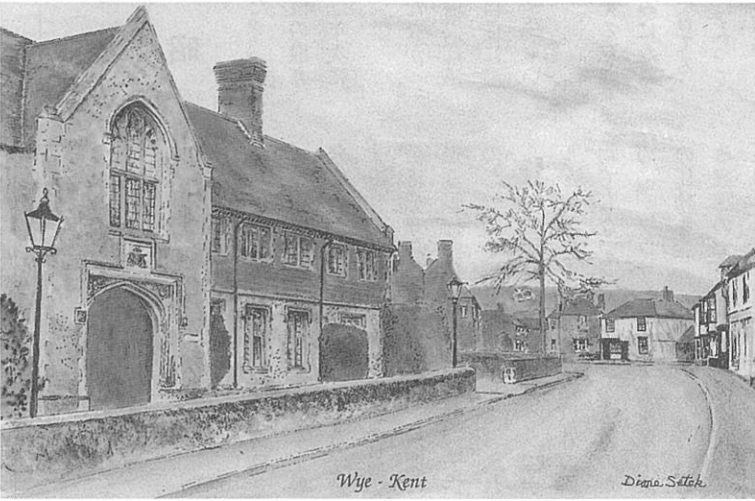
学生院生は質実剛健、ジーンズにTシャツ・スウェーターとブーツが多数でした。先生もスーツとタイはカレッジ長等ほんの一部に限られ、ラフな服装で、若い某研究員は破れたジーンズを愛用していました。但し、試験には先生はガウン、学生院生はまともな服装が要請されていました。学生は休暇以外アルバイトはせず勉学し、生活を楽しんでおりました。

学部卒業者(学士号修得者)名簿は成績によりファースト、セカンド(さらにアップパーとロアー)、サードの四段階に分類発表されておりました。この四段階の学士号は公式なもので一生活いてまわることです(わが産大にもこの方式を導入したいものです)。なお、卒業後、正規の

で論点、図等をスクリーンに写しながら講義を進め、ほとんど黒板を使用していませんでした。なおこの論点・図等は講師名で推奨論文等とともに図書館にストックされ、コピー可能でした(私には便利でした)。ちなみに各年度の全試験問題は一冊に製本、ストックされ、試験の傾向と対策に利用されておりました。また講義中に手をあげ質問、発言することは許され奨励されておりました。

就職には経験年数が必要とされること等もあり、二年程の失業、パートタイム就業が通例とのことでした。大学生、若者には厳しい社会のように見受けられました。

ゆるやかに起伏する美しい丘陵、林・牧場・畑を通る公共歩道、ディジー、ブルーベル、落ち着いた田舎のバブ、一瞬の魅力的な笑顔と「モーニング」等々、私はイギリスのカレッジと田舎がすっかり好きになりました。



父母の会

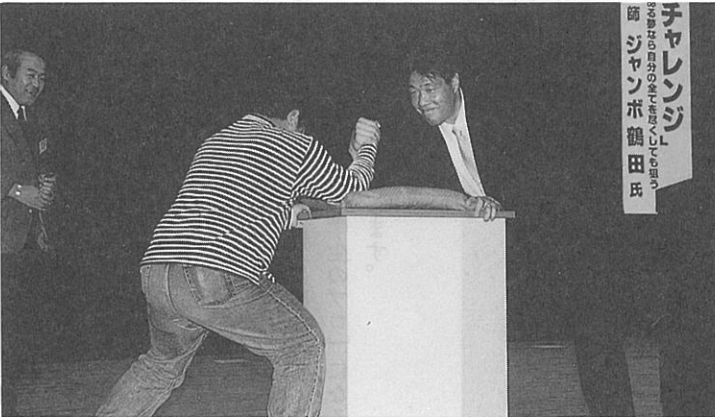
父母の会は、設立から3年を経て会員数も千六百人を越え、本年は学生、父母、大学の三者協働体制を強化するとともに、支部活動を充実させるべく努力してきた。まず、五月に総会が開催された。

これは昨年より一か月も早い開催だが、少しでも早く大学や学生生活のことを知りたいというご父母の希望に応えたものである。総会には全国から二百人以上の会員が出席し、大学の現状や今後の展望について真剣に耳を傾けるとともに、懇親会では情報交換が盛んに行われた。

十一月は、学園祭にあわせてジャンボ鶴田氏を招き、熱気溢れる文化講演会が開催され、学生や市民にも非常に大きな反響があった。

十二月からは、各地で支部総会が開催された。教職員が就職や学生生活などについて説明するのだが、ご父母と直接話し、その熱意に触れる度に、責任の重さを痛感している。なお、会員からの貴重な会費は、このような表立った活動だけでなく、学生生活に係わる

様々な分野に活用されている。就職難、雇用不安、高齢化社会など、学生達を取り巻く環境は厳しいが、充実した学生生活を送れるように、これからもご父母の理解と協力を得て支援していきたい。



父母の会、文化講演会にて

平成9年度の入試の概況

入試部長 竹内明眸

昨年11月実施の指定校推薦入試を皮切りに、本年3月実施のC日程入試まで、全10区分の入学試験が無事実施された。今年の入試の特徴を一言で示すならば、例年にないおだやかな天候とは裏腹に、従来にはない変化の激しい入試であったと言いうことができる。

今年の入試は国公立大学ならびに私立大学の多くを大きく翻弄するものであり、特に女子大学などの一部の大学を除き、軒並みに志願者を大きく減らす結果となった。その背景の一つとしては併願受験の減少傾向を指摘することができる。県内における受験傾向として、従来は国公立大学志願者の場合で2、3校、私立大学志願者の場合には7校程度が平均受験校数であったのが、今年は平均1、2校と、きわめて少ない併願状況となっている。このことが示すことは「入れる大学」から「入りたい大学」へと受験者の大学選択基準がより高められてきていることであり、今後は内容面でのより一層の充実と独自性の訴求が大学側に求められる重要課題といわざる

をえない。

こうしたなかで、本学をとりまく入試環境の厳しさについても同様であり、志願者数に関しては、経済学部で1556名で昨年比3割減、人文学部で419名と同じく4割減となった。とくに東京、大阪、名古屋などの都市部での落ち込みが大きく影響する結果となり、今後の入試展開をおこなううえで重要課題となった。

一方、今回の入試でみられた好材料としては、今年より新たに実施した公募制推薦入試の健闘がある。これは過去に一時実施した自己推薦入試を、より公募制に重点をおくかたちで再編したもので

あり、当初の予想を上回る志願者を確保することができた。また文部省の要請を受け、新たに導入した専門高校特別推薦入試についても定員の2倍を超える出願となり、好調なスタートとなった。広く能力を伸ばす機会の提供を目的

とする本学として、今後もこうした入試区分についての一層の拡充を図っていく予定である。最後に、18歳人口の減少、県内他大学との一層の競合化、さらには留学生の確保が難しくなるなど、本学が直面するさまざまな課

題が増すなかで、受験環境の改善ならびに教育環境の拡充を図るなかで、地元密着型大学としての一層の活路を求めていく所存である。

平成9年度入試結果

(経済学部)

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
指定校推薦	55	57	57	—
スポーツ推薦	10	11	10	—
公募制推薦	20	86	20	185/250
専門高校特別推薦	5	12	5	181/250
一般A日程	100	592	163	110/200
センターA日程	20	200	70	—
一般B日程	60	416	174	104/200
一般C日程	20	145	47	124/200
センターC日程	10	36	20	—
社会人	若干名	0	0	—
帰国子女	若干名	0	0	—
留学生推薦	若干名	1	1	—
合計	300	1,556	567	—

(人文学部)

入試区分	定員	志願者	合格者	合格最低点
指定校推薦	22	22	22	—
スポーツ推薦	3	1	1	—
公募制推薦	5	7	7	122/250
一般A日程	35	126	84	91/200
センターA日程	10	73	65	—
一般B日程	15	83	58	81/200
一般C日程	10	52	37	90/200
センターC日程	5	18	17	—
社会人	若干名	0	0	—
帰国子女	若干名	0	0	—
留学生推薦	45	37	36	—
合計	150	419	327	—

(平成9年3月18日現在)

就職環境好転も油断できず 産大生97%が内定：就職課から

〔平成八年度就職状況〕

リストラが一巡し、就職難がわずかに緩和した。大卒の求人倍率は、六年ぶりに増加に転じ、男子が一・八〇倍（前年一・三三倍）、女子はまだまだ厳しいものの、〇・六四倍（前年〇・四五倍）となった（リクルート・リサーチ社調査）。ただし、関東地区と関西地区の大学を除く、各地方の大学の就職内定率は、横ばいあるいは前年度以下。大都市圏の雇用環境はかなり回復したものの地方まではなかなか及ばなかったようだ。

本学への求人件数は、一、四二一件と前年度に比べ一〇パーセント増加した（二月末日現在）。就職内定率と就職希望率も優に全国値を上回っている（別表①②）。業種別の内定先は、別表③のとおり。前年度に比べ、製造業、サービス業、金融業への就職が増え、卸売業、建設業、運輸・通信業、小売業への就職が減った。

〔平成九年度の見通し〕

ここ二、三年採用を抑制し続けた反動から、大卒の雇用環境はようやく好転した。平成十年三月卒業予定者については、更に採用枠

が広がりそうな気配。一部の就職情報メディアの調査では、大卒男子の求人倍率を文系・理系とも二倍以上と予測しているところもある（求人倍率が二倍を超えると、中小企業の採用は売手市場となる）。特に、大都市圏の企業が積極採用に転じており、大手企業を目指す学生にはチャンス。また、首都圏からのUターン希望者は、間違いなく減少するので、地方の就職戦線は緩和する見込みだ。

しかし、景気そのものは停滞状況が続いており、本格的な雇用の回復とはいえず、あくまで一時的な反動、消費税アップ後の急変もありと慎重にとらえる必要がある。また、新潟県については、私大四校が出揃うため予断を許さない。

〔就職協定廃止の影響〕

約二十年ぶりに「協定なき就職戦線」となる。紙面の都合から詳しい経緯は割愛するが、「守られない協定は不要」との日経連会長の廃止提案に、教育環境の確保、就職活動の秩序維持等の要望から継続を主張する学校側と文部省が、押し切られるかたちになった。さて、その影響だが、ひとこと

というなら「早期化、長期化、オセロ現象」に集約できる。廃止初年度に限ってみれば、雇用環境の好転と採用活動の時間差によって、学生には早くから内定が出る。しかし、学生は「更に上位企業」をねらい、意思決定を遅らせ、多数の内定辞退が起こるだろう。逆に、一部の企業では、早期内定者や、後から来た有名校の学生と取り替える「内定取消し」の暴挙に出るところもあるだろう。こうした、内定辞退と内定取消しの応酬を「オセロ現象」と呼んでいる。平成九年度の就職戦線は、学生側、企業側、丁々発止の激しい攻防が予想される。

〔就職合宿研修会を開催〕

さる、二月十九日と二十日の両日、新潟県高柳町の「県立こども自然王国」で、一泊二日の「就職合宿研修会」を開いた。この合宿は、周辺に迫る就職戦線の前に、本学就職活動の牽引車となる学生の養成を目的とするもの。八十名定員の募集に対し、経済学部四十五名、人文学部二十五名の学

生が参加した。指導には、就職委員の教員六名、就職課職員四名そして就職戦線を勝ち抜いた四年生十二名があたった。更に、商社、銀行、ホテルに勤務する卒業生三名も応援に駆けつけてくれた。研修一日目は、OB入社体験談、業種別懇談会、模擬面接、グループ討論を大ホールで、会議室では教職員と三年生一対一の個別指導を同時並行で進めた。午後一時から始まった研修が終了したとき、時計の針は夜中の十時を過ぎていた。

【別表①】 本学就職内定状況（平成9年3月12日現在）

	全体	男子	女子
内定率(ア)	97.7%	97.9%	96.7%
就職希望者数(イ)	348人	288人	60人
内定者数(ウ)	340人	282人	58人
未定者数	8人	6人	2人
就職を希望しない者(進学含む)	23人	20人	3人
卒業見込者数	371人	308人	63人
前年度内定率	95.9%	95.6%	97.8%

注：(ア)内定率=(ウ)内定者数÷(イ)就職希望者数

【別表②】 内定状況の比較（平成8年12月1日現在）

		全体		
		男子	女子	
新潟産業大学	内定率	89.6%	89.8%	88.3%
	就職希望率	94.5%	94.7%	93.8%
全国4年制大卒(文部省調査)	内定率	83.5%	87.0%	76.0%
	就職希望率	75.3%	73.9%	78.4%

注：就職希望率=就職希望者数÷卒業見込者数

【別表③】 本学内定先の業種別分類（平成9年3月12日現在）

業種	全体		男子		女子	
	内定者数	%	内定者数	%	内定者数	%
小売業	90人	25.8%	82人	28.5%	8人	13.3%
サービス業	64人	18.4%	51人	17.7%	13人	21.7%
製造業	58人	16.7%	47人	16.3%	11人	18.3%
卸売業	44人	12.6%	43人	14.9%	1人	1.7%
金融業	43人	12.4%	25人	8.7%	18人	30.0%
建設・住宅不動産	18人	5.2%	14人	4.9%	4人	6.7%
公務員	16人	4.6%	15人	5.2%	1人	1.7%
運輸・通信業	6人	1.7%	4人	1.4%	2人	3.3%
その他	1人	0.3%	1人	0.3%	0人	0.0%
未定	8人	2.3%	6人	2.1%	2人	3.3%
合計	348人	100.0%	288人	100.0%	60人	100.0%

た。研修二日目は、早朝六時半のラジョ体操に始まり、グループ討論、模擬面接を繰り返した。また、四年生の提案で「体験談コーナー」も設けた。正午、全ての日程を終え昼食をとり、スクールバスで大学に帰ってきた。なお、今回の合宿は、新潟県内の大学としては初めての試みであったことから、県内テレビ二局、地元紙二社、全国紙一社が取材に集まった。

卒業式

— 社会へはばたく —

371名

平成9年3月19日(水)午前10時から柏崎市市民会館大ホールにて第6回卒業式が盛大に挙行された。今回卒業証書を授与されたのは経済学部371名であった。式は卒業証書授与のち、学長式辞・来賓祝辞と厳肅な雰囲気の中で進行的。式終了後各ゼミナール単位で個人個人にゼミナール指導教員から卒業証書を授与され、各所で歓声があがった。

会場を移して恒例の謝恩パーティーが在学生で組織する卒業委員会主催で開催され、卒業生と父母は恩師と在学生に囲まれ、思い出やこれからの進路について語り合った。

平成8年度の各賞受賞者は次のとおり。

●学長賞

山田 麻 里さん

●文化・スポーツ功労賞

尾日向 和 孝君(卓球部)

川 田 倫 也君

(水泳部水球チーム)

高 取 朋 代さん(空手部)

●国際交流功労賞

平 河 正 利君

紅葉祭を終えて

経済学部四年生 堀 井 祐 介

今回で九回目となった我が新潟産業大学の紅葉祭が終わり、早や3ヶ月の月日が過ぎようとしています。「全員集合」というテーマで行われた三日間の紅葉祭、晴天にも恵まれ無事成功に終わり、ほっとしている今日この頃であります。

さて、今年の紅葉祭の特徴は、過去の伝統にこだわらず新しい企画を取り入れたこと、そして来場者の数が過去最大であったことです。

具体的な企画の内容については、まず例年は市民会館で行っていたコンサートを学内講堂で行うことにより、より多くの学生の参加者が得られたこと。各種イベントの改善や景品の充実化。そして学内装飾をより芸術的なものにするにより紅葉祭全体の雰囲気確立できたことなどが挙げられます。

また、先に挙げたコンサートはもとより、三年前から始めたフリーマーケットなど紅葉祭恒例の目玉イベントなどもより定着し、本学学生はもとより、多くの市民の方々との交流もより深まりつつあることも大きな収穫といえます。

来年度は、節目となる十回目を迎える紅葉祭。むろん本年度以上の盛り上がりを見せることと確信しております。

最後に紅葉祭開催に協力して下さった多くの方々に参加者全ての皆様ありがとうございました。また来年の紅葉祭で一緒に楽しみましょう。



紅葉祭、フリーマーケットにて

◇◇◇ 医務室より ◇◇◇

今年も学生の定期健康診断の時期が来た。毎年、数千人の学生の健康診断をどのようにして行うか苦慮していたが、平成8年度からは、業者委託により、こちらの負担はかなり軽減した。7年度まで抵抗感を抱きながらやむを得ず学生にアルバイトを頼んでいたが、それも廃止できた。医師の聴診を含めて一連の検査を一気に実施でき、学生の待ち時間が減少した。受診率が全体で9%も上昇したことは予想外の結果であった。

健康診断は、実施することが最終目的ではない。異常所見のない学生も含めて学生の自己管理能力を高めるような事後処理が重要である。今のところは、胸部X線所見、たんばく尿、貧血、高血圧など「異常」と判断された学生への対応で精一杯である。一次集団検診で「引っかかる」学生数は、延べ三百名余りにもなる。まず掲示で呼び出し、医務室で再検査を行う。一度の掲示呼び出しで応じる学生は半数にも満たない。再三呼び出しを繰り返す。異常の種類や程度によっては電話や手紙で連絡する。それでも、最終的に呼び出しにに応じない学生の検査結果報告書が三十通余り、心配とともに私の手元に残っている。

開学の頃を顧みて

図書館事務室 松原 寿之

「十年一昔」ということばがあります。開学の年に図書館司書として新潟産業大学に就職、現在にいたるわけですが、それももう、「二昔前」といわれておかしくない年月がたつてしまいました。

現在は学生であふれかえっているキャンパスも、当時いるのは一期生のみ。どこががらんとした、印象はぬぐえませんでした。

それは図書館も同様で今でこそ図書・雑誌の収納場所の確保に頭を悩ます毎日ですが、その頃は逆に隙間だらけの書架をみては、蔵書の少なさにため息をつく日々が続きました。

このように人けが少なかつたせいか、まわりの豊かな自然から動物が大学構内にはいりこんでくることもありました。野生動物に限らず、逃げてきたのか、はぐれたのか、チャボが大学周辺に出没した時もありました。学生や職員にもなついていたようですが、いつのまにか姿を消してしまいました。

今にして思えば、のどかな面もあった時代でした。

本学園創立50周年を迎えて

学校法人柏専学院は、今年で創立されてからちょうど50年の節目を迎えます。本学園は、昭和22年に下條恭兵先生により柏崎専門学校を開校し、昭和33年に新潟短期大学と改称され附属高等学校を併設、昭和63年に新潟短期大学を改組転換し新潟産業大学が経済学部の単科大学として開学いたしました。平成6年には人文学部を増設

し、総合大学としてますます発展しております。

ここに至る間、ひとえに関係各位の本学園への篤志と並々ならぬご尽力の賜物と心より感謝申し上げます。ついでには、祝50周年の記念と感謝を込めて、式典及び祝賀会と、また市民向け



に、本年11月2日(日)、柏崎市民会館において、大物文化人の講演を予定しております。

金田 一郎 教授 「環日本海新潟賞」を受賞

本学経済学部教授の金田 一郎先生(前学長)が、平成9年1月27日、新潟市のホテル新潟で、新潟県主催「第5回環日本海新潟賞」を受賞されました。これは、新潟県が環日本海地域の平和と繁栄に寄与することを目的に環日本海交流圏の形成、発展に貢献された個人・団体に対して与えられる賞です。

金田先生は、これまで本学の学長として、環日本海諸国との経済的、文化的交流の隆盛に鑑み、国際的な場において活躍しうる人材の育成を教育上の理念とした全国唯一の「環日本海文化学科」を設立し、環日本海諸国から留学生



受け入れや学術交流協定の締結など幅広い活動を続けられたことが評価されました。

名誉教授の 称号授与について

平成8年11月20日に本学元教授の中村忠一先生、佐藤一彌先生へ本学名誉教授の称号が授与されました。

すでに多くの大学で実施している名誉教授制度について、本学でも多大な貢献のあった教員へ授与したいという声の中制定され、平成8年10月30日の全学教授会で最初の授与者が決定されました。両先生とも、開学当時から在籍し、経済学部長等の要職を歴任され、本学の発展に寄与されました。



校友会通信

校友会事務局 刈部 光雄

校友会は、卒業後の会員相互の親睦と連携強化を図るために、本年度も数多くの事業を推進してまいりました。特に本年度は各支部組織の構築と活動の活性化を図ってきました。

◇ ◇ ◇
広く県内外に活躍している会員相互の連携を深めるため、各支部の設立と総会が開かれました。

- 新潟支部総会 (H8・4・14)
- 魚沼支部設立総会 (H8・9・28)
- 飯豊支部設立総会 (H8・11・9)
- 北陸支部設立総会 (H8・11・23)
- 関東支部総会 (H9・3・9)
- 県央支部設立準備会

◇ ◇ ◇
ここで一応県内組織の確立をみる事ができたとともに、県外支部として関東、北陸の支部の結成ができました。今後は、更に県外支部結成に向けて努力していくつもりです。

◇ ◇ ◇
現在、会員数も今春卒業する新入会員を含めると、約六千余名になり益々会の発展が期待されます。同窓意識の高揚を高め、活動の活性化を図っていくためにも、各位の一段のお力添えを願っております。

編集後記

入試課 福田雅企

私が所属する入試課の業務の中で最も精神的に緊張し、肉体的に過酷なものとして高校訪問がある。昨年度は県内はもちろんのこと、宮城県、福島県、群馬県、富山県、石川県、福井県等、複数の県へ出張をした。各高校の進路指導室の先生とお会いして、本学についての様々な情報を提供する。また、受験生には本学の良い所を十分知ってもらいたいという気持ちからおのずと熱が入る。

高校訪問をする、当然ではあるが、いろいろな校風の学校があり、いろいろなタイプの先生がいらつしやる。私自身いろいろと勉強となることが多く、非常に有意義である。

また、廊下を歩いていると、高校生から「こんにちは」と感じよく挨拶をされた時などは、気分がよいものだ。

交通手段としては、主に車である。天気の良い日に緑の多いところを運転している時は、風情があつて良いものである。出張中のささやかな喜びである。

現在の高度情報化社会の中にあつても、「口コミで新潟産業大学を知ってもらおう」ことは、受験生への究極の広報でないかと考える今日この頃である。